尾道草紙14

尾道市立大学　創作民話の会

尾道草紙 14

尾道市立大学 創作民話の会

税込 500円

はじめに

日本文学学科　教授
光原 百合

尾道市立大学創作民話の会発行、『尾道草紙14』をお届けします。本書は尾道市立大学芸術文化学部日本文学科と美術学科の共同制作作品集です。日本文学科の学生たちがつづる、尾道を舞台にしたオリジナルの物語と、美術学科学生たちが描くイラストからできています。

創刊当時から変わらないテーマは、「尾道の魅力を自分の目で見つけ、それを輝かせるような作品集を作る」ということ。今年も尾道の魅力的な場所が登場する、個性的な物語七編が揃いました。千光寺公園、アジサイに彩られた持光寺、久山田水源池……。そして今年は、若者たち、おさななじみ、夫婦など、様々な形の恋や愛がつづられた作品が多いのも特色です。本書を手に尾道を散策していただき、それぞれの物語の舞台を確かめたり、ご自分の物語を見つけたりしていただければ、これほど嬉しいことはありません。

本書収録作品が、末永く尾道に根付くことを祈りつつ――。

もくじ

2 はじめに

7 先輩はそう言って、ポケットからスマホを取り出した　山田 茉里奈　絵・平 華乃

13 虹のたもとで　安部 紗弥香　絵・姫野 七海

21 雨とアジサイ　樫山 奈由　絵・伊東 桃奈

29 よるのはなし　見谷 香乃　絵・矢川 千陽

41 その夏　谷坂 利香　絵・斎藤 七世

51 在りし日の夕暮れ　石原 遼一　絵・山根 翔

63 約束の日　則直 真衣　絵・今井 ゆめ

77 創作民話マップ　絵・後藤 祐衣

80 執筆後記

84 おわりに

表紙　絵　・小佐々 瑛美

装幀・尾崎 瞳

先輩はそう言って、ポケットからスマホを取り出した

先輩はそう言って、ポケットからスマホを取り出した

山田茉里奈　絵：平華乃

「先輩」
「なんだ！」
「なぜ私たちは、日曜日の朝っぱらから尾道にいるのでしょう」
「俺が誘ったから！」
「質問変えますね。なぜ尾道に行こうと言い出したのですか？　しかも昨日の夜に」
「なんとなく。昨日テレビで見て、行きたいなーって思ったから」
「なんとなくに後輩を付き合わせますか」
「だってお前、誘ったら絶対来るし」
「いつも暇みたいに言わないでください。今回だって、謝り倒してバイト代わってもらったんですからね」
「篠田！」
「なんですか」

「千光寺公園ってところに、恋人の聖地があるらしいぜ！　テレビで特集やってた！」
「知ってますよ。ハート形の錠がたくさん掛かってる所でしょ。カップルがお互いの名前書いたりメッセージ書いたりして」
「篠田！」
「なんです」
「俺らもそれやりたい！」
「先輩。私たちは、俗にいう『お付き合い』をしている仲ではありません」
「じゃあ『お付き合い』しよう。そしたら篠田、錠かけてくれる？」
「……そこまでして、錠をかけたいですか？　私と」
「篠田じゃなきゃ意味ないよ」
「先輩」
「なに？」
「さては私のこと好きでしょう」
「うん」
「じゃあ、付き合うしかないですね」
「やった！　ね、篠田、手つなごう」
「つなぐと歩きにくいですよ。道が細いし、急な坂道ですから」
「えーっと、じゃあ、迷子になりそうだから、つなごう」
「一本道ですよ」
「じゃあ、寒いから」
「上着にポケットがあるでしょう」
「でっかい穴あいてんの」
「じゃ、つなぐしかないですね」
「うん！　へへ、篠田の手、あったけーな」
「先輩」
「うん？」
「月がきれいですね」
「朝だぜ？　月なんて見えないよ」
「見えないけど、きれいだなって思ったんです」

11　先輩はそう言って、ポケットからスマホを取り出した

「ふーん？　なあ、篠田」
「なんですか？」
「篠田は俺のことどう思ってる？」
「さっき言いました」
「え⁉ 俺、聞き逃した！　もっかい言って！」
「錠に書いてあげますから、先輩は公園に着くまでに『月がきれいですね』の意味を調べておいてください」
「わかった！」尾

虹のたもとで

虹のたもとで

安部 紗弥香
絵：姫野 七海

昔の事だよ。瑠璃山には、蛇（じゃ）が池という池があるんだが、そこには龍神が住んでいたんだ。龍神は静かな尾道を気に入っていて、木々の隙間から零れる日差しを浴びながら昼寝をするのが楽しみの一つだった。

時が流れて、北前船での商いが盛んになると、尾道は良くも悪くも賑やかになっていった。人が増え、瑠璃山の付近にまで声が届くようになると、龍神は静かに昼寝も出来なくなった。

どうにも我慢できなくなった龍神は、蛇が池を出ていくことにしたんだ。瀬戸内海をぐるりと回って、大雨を降らせてから天へ昇っていった。

これから話すのは、その傍らで起こった、不思議なお話。

その日は朝から風が強く、太陽は厚い雲に覆わ

れていた。強く打ち付ける雨に夏の空気は洗い流され、普段は聞こえてくる波音までをもかき消している。

そんな中を、一人の娘が走っていた。雨に濡れて張り付く髪の毛に構わず、懸命に足を動かしている。時折雨が口に入るのか、咽せて転げそうになっていた。

まだ雨が土を湿らせるほどしか降っていなかった頃、その子は母の手伝いで朝から台所に立っていた。

「野菜が切れたら、わきに避けて置いておいてね。母さんちょっと南瓜とってくるから」

そういった母は、こほと咳をもらす。

「体冷やすとよくないから、母さまは中にいて。ハツが美味しい南瓜とってくるから」

ハツといった女の子はそう返して、母から道具を預かり裏庭へと歩いていった。母に似ず頑丈なからだをもったハツは、小さいときから母の手伝いをよくする子どもだった。父は早くに死に、今は母と子だけで暮らしている。

畑の土は雨水を含み普段より黒々として見える。降り続いている雨は、少しずつ強くなっているようだ。ハツは顔にはねた泥を拭い、ずっしりとした南瓜を持って台所へ引き返した。

――南瓜は煮付けにするのかな。

父が好きだった少し甘めの味付けを、ほくほくの南瓜を口に含んだときの温かさを思い出しながら、彼女は雨も弾くような調子で歩く。

「大きい南瓜とって――母さま！」

台所へ戻ってきたハツは、持っていた南瓜を放り出して駆けだした。ごとりと鈍い音をたてて南瓜が床に打ち付けられる。それには目もくれず、つい先ほどまで自分が立っていた場所に倒れる母の身を抱え起こした。熱を持った肌が、じっとりと汗をかいている。

敷いたままだった布団に母を寝かせたハツは、すぐに医者を呼び、母を診てもらった。医者の反応は、思わしくなかった。

港にたどり着いたハツは、その光景に言葉を失った。想像もしなかったほどの荒々しい海に、初めて足を止める。ざぶんと波が砕け、白い飛沫が足下まで届いた。

すぐそこにある対岸を見据えたまま、ハツは唇を噛んだ。

島の医者の言葉がよみがえる。万が一のことがあるかもしれないと告げた医者は、尾道にいる知り合いならば、母を救えるかもしれないと語った。

そうしてその医者に母を診てもらうために、ハツは雨の中を駆けてきたのだった。

荒れ狂う波は恐ろしい。せり上がってくる恐怖を振り払って、ハツは再び走り出した。自分にも動かせる舟が一艘くらいはあるだろうと、顔を打つ雨に逆らって探し続ける。そして見つけたのは、誰のものともわからない古ぼけた舟だった。

荒波に揺れる舟に乗り込み、縄を解くと、櫂で押し出すまでもなくハツを乗せたまま陸から離れていく。傾く板の上では、まっすぐ立つことすら難しい。それでも目を閉じることだけはせず、懸命に舟を漕ぎ尾道を目指した。

あと少しというところだった。一際強く水をかいた瞬間、灰色の波が舟を襲った。再び舟が海上にその姿を現したとき、そこに人の姿は無かった。

ハツは海の中で息を求めて水をかいた。目をあけることもできず、めちゃくちゃに伸ばした手が何かを掴むことができたのは、幸運だったとしかいいようがない。

「ム……人間を巻き込んでしもうたのか」

その声が聞こえたとき、ハツは強く打っていた心臓がゆっくりと落ち着いていくのを感じた。息苦しさが消え、手足が熱を取り戻していく。水中

に投げ出されたはずなのに、息ができる。

ゆっくりと目を開き、ハツは自分の目を疑った。それは龍だった。小さな頃に父がハツに話して聞かせたような龍が、目の前に存在していた。

暗いはずの視界の中で、春の陽光に照らされたような鱗が美しく輝いている。

ハツは、龍の手の中にいた。

「すまぬな。最後にひと雨と思ったのだが、ちと張り切りすぎたらしい。ほれ、何か願いを言ってみろ。ここはひとつ、詫びとして叶えてやろう」

唸るような声が、彼女の体に直接響く。それを聞いたハツは飛びかからん勢いで声をあげていた。

「母さまを、母を助けてください！」

ハツは龍に、早口で語った。幼い頃父に逝かれ、それ以来母親と二人で暮らしてきたこと。その母の命が危ないこと。医者を呼ぶために海を渡ろうとしていたこと……。

龍はその話を、口を挟まず静かに聞いていた。

そして「聞き届けた」と頷き、目の前の娘に二枚の鱗を持たせた。

「青い鱗は万病の薬となる。砕いて病人に飲ませよ。赤い鱗は災厄を退ける守り。肌身離さずに持っていれば、いつかお前を救うだろう」

ハツが鱗を受け取ると、触れた指先から全身に春の風が吹き抜けたような気がした。もう不安は無い。絶対に大丈夫だと確信できるような、そんな温かさに包まれている。

「ほれ、掴まっておれよ。振り落とされてもひろえんからな」

龍の唸るような声に頷く。それを認めた龍は、海の中から勢いよく飛び出した。飛沫が上がるが、それがハツを襲うことは無かった。ふわりと潮風をまとう髪が風にたなびき、からりと乾いた衣には塩が浮かんでいる。

雨は止んでいた。太陽を厚く覆っていたはずの雲も晴れ、洗われた空はどこまでも突き抜けるよ

うにあおい。輪郭のはっきりした雲が泳いでいく。龍は空を昇っていって、そして向島へと降っていった。

通り道には龍から滴った海水が弾け、光を反射させた。急に嵐が止んだことを訝かしみ外へ出てきた人々は、海から向島にかけてかかった鮮やかな虹を眩しそうに眺めたという。

「本当にありがとうございます」

虹のたもとで向かい合ったハツと龍は、しばし言葉を交わさずに向かい合っていた。ハツの背後には、慣れ親しんだ小さな家。とろりと纏わり付くような空気が風に動いた。運ばれてきた蝉の声に、ハツは視線を木々の向こうへ遣る。

龍は黙ったまま、咳払いを一つして早く行けというようにハツの家を指す。ハツは頷くと、家の中へと駆けていった。

「人間も、悪いものではないんだがなあ。昼寝ができんのはちと……いや、かなり辛い」

龍はそう呟くと、今度こそ天へ向かって消えていく。

ハツは戸口から龍の消えていったほうをこっそりと見つめ、ありがとうと呟いた。■

雨とアジサイ

雨とアジサイ

樫山奈由

絵：伊東 桃奈

僕は右手に片道切符を握りしめ、朝の満員電車に揺られていた。座席に座っている中年の会社員も、僕の目の前に立っている女子高生も、皆ここ最近の曇り空のように薄暗い表情をしている。その中で一人、僕だけが心を躍らせていた。

「はは、月曜日から仕事休んじゃったなあ」

今は隣に妻もいないし、僕のこの独り言を拾ってくれる人は誰もいない。ただ左手に持ったこの透明の傘だけは、聞いてくれたであろう。

「もうすぐ梅雨入りするんかなあ」「そうじゃろうな。じゃけど今日の降水確率は一〇パーセントじゃけ、今日は雨来んよ」

何処からか聞こえてきた方言と同時に、次はおのみちぃ、というしゃがれたアナウンスが耳に入ってきた。よし、もうすぐだ。僕は、今日のために買った洒落た色のシャツをぴんと伸ばし、出口の方を向いた。週初めの陰気くさい電車内ともこれでおさらばだ。

電車から降りても別段清々しいわけではなく、もうすぐ訪れるであろう梅雨の湿った空気が淀んでいるだけだった。尾道駅の改札を抜け外に出たところで視線を上にやる。空には雨雲が少しばかり浮かんでいるだけだ。やっぱり今日来ないかな。折り畳み傘にすれば良かった。そんなことを考えながら、ちょうど一年前、当時まだ恋人だった妻と尾道に出かけた時のことを思い出す。あの日は今日と違い、朝からかなり強い雨が降り続く、日曜日だった。

「あなたと出かけるといつも雨が降りますよねえ」

彼女の表情は無地の青い傘に隠れてよく見えなかったが、いつも通り僕をからかっていることは分かった。

「いや、君が雨女だからだろ」

「ここに雨男が居るからですってえ」

彼女にもう一度視線をやると、傘から顔を覗かせた彼女がクスクス笑いながら僕を指さしていた。

雨の尾道を、しばらく当てもなく歩いていた。傘を差しているせいでいつもより二人の間が広く、口数も減っていくのが分かる。狭い路地を歩き始めたころには、二人とも黙ってしまっていた。

「あの」沈黙を破ったのは彼女だった。

「雨、嫌いですか？」

「え」突然の質問に戸惑う。

「えっと、そうだな。あまり好きじゃないな。傘で君の顔がよく見えないからな。ただでさえ君は恥ずかしがって、僕に顔をよく見せてくれないのに」

「そ」

そうですか、とどもる。彼女も想定外の返しに戸惑っている様子だった。いつもからかわれているのは僕の方だったから、彼女の困惑した表情は嬉しい。問題は、それが傘で見えないということだ。今度透明の傘を買おうかと言ったら、「同じ傘に入れば顔なんていくらでも見られますよ」とクスクス笑っていた。結局、困惑したのは僕の方だ。

「あ」彼女が突然立ち止まった。

「見てください。こんなところにお寺が」

僕たちは、彼女が指さした寺の前にそびえ立つ、大きな石門にそっと足を踏み入れた。境内は、色とりどりのアジサイによって鮮やかに彩られている。思わず、オオという低い声が、彼女のワアという高い声と重なる。

「凄い！　アジサイ寺ですよ。綺麗ですねえ」

彼女は青紫色の花々を見てはしゃいでいる。きっととびきりの笑顔に違いないのに、傘のせいでまたしても表情が見えない。彼女の笑顔はこのアジサイたちのように綺麗なはずだ。

「なあ、さっきの質問、答えを変えてもいいか」

彼女の顔が僕の方を向いた。

「僕はたった今雨が好きになった。だって、アジサイがこんなにも映えるとは知らなかった。すごく綺麗だな」

僕は真剣にそう言ったが、彼女はまたクスクス笑った。

「雨女の私に感謝してくださいねえ」

「いや、ここに雨男が居るからだろ」

そんな何度目かのやりとりを、二人で笑った。

しばらくアジサイを眺めていた彼女が、突然鼻をすすりだした。僕は驚いて顔を覗こうとしたが、彼女が体調を崩しやすい体質だということを思い出す。

「もしかして雨で冷えたのか。風邪を引いてしま

う前にどこか喫茶店にでも入ろう」
僕が、着ていた上着を彼女の肩に掛けようとした時、彼女が僕を見て言った。
「私決めました。来年の今日、またここで一緒にアジサイを見ましょう。私と約束してください」
突然彼女が決めた約束を、来年の今日は平日だろうと言いかけてやめた。彼女が今にも泣きそうな顔をしていたからだ。
「僕は必ず約束を守る男だ。いいんだな？」
「私も絶対に約束を破らない女です。来年、あなたと一緒にアジサイを見ます」
「そうか、それなら約束だ」
僕は彼女の手を引いてアジサイ寺を後にした。
握った彼女の手は小さく震えながら、僕の汗ばんだ手を冷やした。
「はは、久しぶりに手を繋いだなあ」
思わず口に出た僕の小さな独り言を、彼女は「そうですね」と笑って拾ってくれた。

さっきまで見えていた青空はゆっくりと雲に隠され、辺りは照明を落としたかのように暗くなっていた。
「お、一年ぶりだな」
尾道駅から数分歩き、アジサイ寺に着いた。大きな石門は雨が降っていなくても迫力がある。でも、色とりどりのアジサイは、綺麗だが何か少し違うように感じた。何でだろう、と花びらに触れようとした時、頬にチョンと冷たさが触れた。
「あ」
すぐにサアサアという音に包まれた。やっと来たか。僕は家から持ってきた透明のビニール傘を開いた。
「降ると思ったよ」
風が、アジサイの葉をクスクスと鳴らす。
やっぱりあなたは雨男ですねえ、と笑われた。

そんな気がした。
「いや、ここに雨女が居るからだろ」
僕も笑った。
「ほら、雨でアジサイがよく映えてる。一年前と何も変わらない。すごく綺麗だ。君のおかげだよ」
僕のその言葉に、いつもみたいなからかいの言葉は返ってこない。
「実は傘は一本しか持ってきてないんだ。君が同じ傘に入りたいって言ってたから」
傘を少し横にずらして隣をあけると、雨晒しになった肩が濡れてシャツが変な色に染まってしまった。僕も一年前と変わらず格好つかないな、と笑おうとした時、傘を握った手がじんわりとしみ込むように冷たくなった。君も変わらず冷たい手だな、と笑いながら呟く。水たまりで揺れている僕の隣には、誰もいない。
「来年も同じ日にここで会おう。約束だ。平日でも必ず来るからな。……それじゃあ、またね」
僕がそう言うと、ゆっくりと手の冷たさが消えた。遠くなっていく風の音を耳にしながら、濡れて煌めくアジサイを見つめる。よし、僕も帰ろう。そう思って視線を上にやると、いつのまにか雨は止んでいた。
やっぱり君が雨女じゃないか、と笑って傘を閉じる。

よるのはなし

よるのはなし

見谷香乃

絵：矢川 千陽

山の夜はとても静かだ。風がなければ木々は枝をざわめかせることが無いし、鳥や虫たちも夜はねむる。たまに夜更かしの蛙が鳴いていることはあるが、そのくらいである。このあたりは電灯も数が少ない。

いつもその沈黙と暗闇に身を横たえながら日が昇るまでの時間を過ごす私は、その夜久方ぶりに足音をきいたのだった。やあ、どんな人間だろうかと気をめぐらせてみると、足を引き摺るようにして歩いていたのは一人の青年だった。ひょろりとしているが背が高い。長い前髪で目元は隠れてしまっているが、おそらくまだ若いだろう。

青年は、ゆっくり歩いて私の前までくると、背中に背負っていた、やわらかな曲線をえがいた不思議なかたちの大きな箱を下ろし、私に腰掛けた。

ああ、細い足首だ。そして比例するように、私にかけられる体重も軽い。一息ついて、彼は大きな箱の側面にある金具に指をかけた。カチャリ、と金属のぶつかる音がして、箱がひらかれる。

箱の中身はなにかの道具のようだった。表面がつやつやに磨かれて、月の光をはね返して輝いていた。青年はそれを持ち上げて、まるでそれが呼吸して、生きているかのように触れた。青年の指先が、ぴんと張られた糸の一本をはじいた。うまれた音は思うより透きとおった音で、ぽぉん、とやわらかに空気を震わせて消えていった。どんぐ

りの転がる音よりやわらかく、蛙の鳴き声よりも深い音だった。青年は糸を何度か確かめるように弾いたあと、その道具を斜めがけにして構えた。

そして彼は、まるで鳥が囀るように歌いだした。人間の男にしては高い声だ。幼い子どものような声はあまく、掠れている。密やかに呟きをおとすような控えめな響き。その歌声に寄り添う、はじかれた糸が生み出した鮮やかな音色。うつくしく、そしてこの静かな夜にふさわしい。

私はこれを「歌う」と彼らが呼んでいることは知っていた。けれど、一介の椅子としてうまれた私には、彼がなぜ、こんなふうに歌うのかはまるきり分からない。歌っているこの青年の姿が、言いようの無い寂しさに包まれていることしか分からなかった。

一分ほどの短い曲が終わると、再びあたりは静寂に包まれた。この青年はただ歌うためにこんな真夜中にこの場所を訪れたのだろうか。私の中で疑問がむくりと頭をもたげる。

青年は羽織っていた上着から、薄くて小さな箱のようなものを取り出した。私は、それが携帯電話というもので、遠くにいる人間と会話ができる、とても便利の良いものだということを知っていた。昼間私に腰掛ける人間たちが、その携帯電話を耳にあててておしゃべりをしているのだ。人間はとてもかしこい。便利なものを易々と作ってしまうものなのだ。私も、かしこい彼らに作られたものの一つであるのだけれど。

青年はちいさな画面に指を滑らせる。砂を踏むような雑音のあと、誰かの声が聞こえた。

『もしもし？』

「もしもし、……聞こえてる？」

『うん、聞こえてるよ』

青年が電話をかけたのは女性のようだった。もしもし、と問いかけた青年の声は、先程までの歌声よりも幾分か低い。どうやら少し緊張しているようだった。

「……お久しぶりです」

『先週会ったばっかりだけどね』

「変な感じだ、なんか。こうやって声だけ聞いたら、全然いつもと変わらないのにね」

彼らはつがい、なのだろうか。どうやら青年の電話の相手方は、この街よりもずっとずっと遠いところにいるらしい。今こちらでは夜だけれど、相手方のいる場所では真昼だそうだ。お互い同じ時間に会話をしているのに、昼と夜が入れ違いになっているなんて、不思議な話である。

「僕が、まさか君に国際電話をかける日が来るとは……」

『だから今日ちょっと緊張してんのね』

「ウッ、ばれてら」

『君分かりやすいもんね！ でも確かになかなか機会ないよね。私も今日がはじめてだよ』

「まじか。おばさんたちには？」

『こっち着いたときに連絡したけどノーカンで』

「だよね、はじめての定義を捉えなおす必要があるな？」

『私が居ないと寂しいでしょ？』

「スルーが華麗。ううん、たしかに君がいないとえらく静かだから、なんか変な感じはするよ。こう、心がすかすかする」

『んふふ、素直に寂しいって言っていいんだよ』

「気のせいでした全然さみしくないです。……ところで、そっちの様子はどう？ 上手くやっていけそう？」

ほんの少し、心配を滲ませた声色で青年が問うた。私の膝をコツコツ叩く指先が忙しない。

『大丈夫だよ』

『あのね、ホームステイ先のお母さんがとっても面白くて。私のことをベイビーって呼ぶの。顔が幼くて赤ちゃんみたいだからって！ でもバカにされてる気が全然しないから、一緒に笑っちゃっ

た！　それから、学校で新しく出来た友達とね、……』

『……はじめてこっちに来た時は流石に、ひとりで不安だったけど。でもね、皆本当にやさしくて親切で。見るもの全部初めてで、驚くことも多いけど。でも、人のあたたかさは日本と変わらないんだなあ、って』

彼女の楽しげに語る声を、青年は律儀に頷きながら聞いていた。忙しなく動いていた指先は、今はゆるく丸められて投げ出されている。

電話越しの彼女が一通り話したあと、今度は青年が自分の近況を聞かせていた。それはこの町の話だった。青年は存外動物が好きらしく、この街では至る所で野良猫が闊歩しているから嬉しいと話していた。

「見かけて近寄っても、全然逃げないんだよ。すっごく人馴れしてる」

『でも飼われてるわけじゃないんでしょ？』

「そう、基本野良。山に登ったところの広場にいつもたくさん居てさ、今年生まれたばっかりの子猫もいるんだよ。毛がまだ産毛でフワフワしてて、ぴょんぴょん跳ねて遊んでるのとか、わたがしが転がって遊んでるみたいでさ。もう、めちゃくちゃ可愛い」

『ちょっと待って羨ましいんだけど』

「フフフ、しかも聞いて驚け、なんとその山には、野生の梟がいるらしい……」

『梟！　私テレビでしか見たことないよ、そんな近くにいるんだ』

「いる、らしいよ。僕は見たことないけど、夜とか鳴き声するんだって！　近くに梟をモチーフにしたカフェもあってさ。梟の小物がたくさん置いてあるらしいよ。しかもそのお店、満月の夜にだけバーになるらしい……しかも、完全予約制」

『うわすごい、映画の中に出てくるお店みたい！』

「もうね、めちゃくちゃオシャレ……どんだけオシャレかっていうとね、一人で入るのがはばかられるくらい」

『つまりまだ中に入ったことはないのね……』

冗談を交えながら話す彼の声は弾んでいた。電話越しの彼女も、とても楽しそうに相槌を打っている。はじめは緊張していた様子の青年は、今やすっかりほぐれて穏やかな様子で話している。何でもないような日常の話をすること。お互いの声を聴くこと。それはきっと、彼らにとっては欠かせない習慣なのだろうと思う。嬉しそうに話す青年も、相槌をうつ彼女も、おたがいの声音があんまりやさしいから、こっそり盗み聞きしている私の方までひどく穏やかでやさしい気持ちになってしまう。

『……もうそろそろ時間かな』

「そうだね。じゃあ、ちょっとまってね、準備する」

『うん。いつもの、お願いします』

青年が、それまで私の上に横たえていたあの道具をふたたび持ちあげた。ちいさな画面から声は聞こえない。沈黙しているようだ。

深呼吸ひとつ分を置いて、そしてあの旋律が流れた。私が先程聴いたあの曲である。しかし、先ほどとは違う歌だった。

歌詞も曲の旋律も、青年の歌声の美しさも変わらない。だが、彼をくるんでいたあの寂しさが、今はまるで感じられなかった。こころが満ち足りていることに感謝するような、喜ぶような、晴れやかな歌声が紡がれてゆく。

私は悟る。この歌はきっと青年が、電話越しの彼女ただひとりに向けて歌うためにつくられた歌だったのだと。彼女が聴くことで初めて、この歌は完成するのだ。曲は終盤を迎え、うまれた音が余韻を残して消えていく。静かな夜がふたたび、音もなく戻ってきた。

『……はあ、本当にいつ聴いても良いなあ君の歌は！　最高！』

「なんたってこれが取り柄だからね」

『もう、君にそうやって自慢げに言われることさえ嬉しいよ。ギターも歌も、どんどん上手になってるよね。……本当は、生で聴きたいところだけれど』

「大丈夫。来年にはまたイヤになるほど聴けるようになるよ」

『うん、そうだよね。また頑張れそう、……いつもありがとう』

それから二人はまた連絡するね、という言葉で結んで電話を終えた。なるほど、あの道具は名前をギターと言うらしい。私にもたれて預けられた青年の背中は、やっぱり細いけれど、広くあたたかった。

青年よ、名も知らぬ青年よ。良いものを聴かせてくれたかわりに、私のとっておきを教えてあげよう。今目の前にある美しい景色が、君には見えているだろうか。いいかい、ここは夜が一等、いっとう美しいのだ。この大きな池の水面に、あの小さな明かりや建物、夜空や山が全部ぜんぶ映り込んで、今日の月は満月だけれど、池のなかにぽっかり浮かんだ月も乙なものだろう？　それから、この満天の星！　ここは大自然の中だからね、空気がとても澄んでいて、星が沢山見えるだろう。なんと、時には流れ星だって見えるのだ。君の歌はとっても綺麗だけれど、きっとこの景色だって負けてはいないのだ。君は気づくだろうか。あの綺麗な歌を聴かせてくれた、お代くらいにはなっているといいんだが。

もちろん、私の声は青年には届かない。当たり前だ。なんたって私はただの椅子だから。だけど、それでいいのだ。二人の間にはほかの何者もいらない。

青年よ。そして画面の向こう、今は遠い国にいる誰か。君たちがどうか、どうか幸せでありますように。私は通りすがりのただの椅子だが、君たちに精一杯の祈りを捧げよう。しかし青年、君は身長の割に少し軽すぎるから、先ずはしっかり食事をとることをオススメしよう。栄養は大事だぞ。

ああ、私もいつか電話越しの彼女にお会いしたいものである。いつか君と電話の彼女、二人で私に腰掛けてくれたら、きっととても幸せなきもちになれると思うのだ。君たちへの祈りに添えてこっそり願うくらいなら、ゆるされるだろうか？

「一度、ここに君を連れてきたかったんだよね」

「そうなの？　なんで？」

「僕、いつも決まってこの場所から君に電話かけてたんだよ。そこのベンチに座って。しかもギターまで弾いて。お洒落じゃない？」

「えらく気取るじゃん！　確かに、すごくアーティスティックかも」

「でしょ？　しかもさ、ここから見える夜ってめちゃくちゃ景色がいいんだ。夜になると池の水面が大きな鏡みたいになってね、向こうに見える学校とか山とか電灯とか、全部映り込んで、一枚の絵画みたいになるんだよ。ちょっと名前思い出せないんだけど、あの、有名な油画のさ、花の絵を描いてるひとの絵みたいでさ！　月も星もすごくはっきり見えて、ほんとに綺麗で。お気に入り」

「ええ、そんなん聞いたらさあ……見たくなるじゃんか」

「でしょ？　この街、夜がいちばん綺麗なんだよね。……あのね、実はもう一つ、僕がここで電話していた理由があってね」

いつも誰かが、僕と君を見守ってくれている気がしたんだよ。……そんな訳ないのにね？　■

その夏

その夏

谷坂 利香

絵：斎藤 七世

「あっつ……」

快適な新幹線から一歩出ると、炎天下だった。列をなした人々が車内へと向かうのをすり抜けて、日陰へと駆ける。担いだリュックサックが重くて小さくよろめく。午前十時過ぎ、時刻を確認している後ろで、大きく出発のベルが鳴った。

レンタカーを借りて走り出す。車内は蒸していて、全開にした冷房も、すぐには効きそうになかった。持ってきたのみかけのペットボトルも、これではすぐなくなりそう。

尾道市立大学は、郊外の山の中だ。お世話になっていた寮も、近くだ。寮母さんが足を痛めてしまったと聞いて、僕はその手伝いをかってでた。車がないと買い物もできない。十五分ほど曲がりくねった山道を抜けると、ダムと隣接する大学が見えてくる。僕らは大学のバス停前で待ち合わせをしていた。

久しぶりに会った寮母さんは、元気だった。見慣れない杖以外には、変わった様子はない。

「わざわざすまんねぇ、元気しとったね」

僕は運転席から出て、後ろのドアを開いた。

「仕事覚えるので精一杯ですよ。」

曖昧に笑って返す。その様子が気に食わなかったらしく、しっかりせんね！ と勢いよく背中をたたかれた。相変わらず厳しい。

待ち合わせていたバス停あたりでは、大小の容器を持った人達が集まっていた。

「そういえば、ここにも給水車来るんですか」

「いやぁ、ここまでは。ボランティアの人らが下まで降りれん人に配っちょる」

なるほど、と一つうなずく。

「いいんですか、水もらわなくて。さっき見たら自動販売機まで飲料水売り切れてましたよ。僕も

一応持ってきたんですけど」
「あらぁ、ありがとう。うちは井戸やけ、ええよ」
「ならよかった」
後輩にでも渡しておきます、と言って、運転席に乗りこもうとする。
ふと目を向けると、道路の反対側に蠢く影。茂みから抜け出てきたそれは、どうやら水源池を目指している、のだと思う。水かきのついた足どりは重く、甲羅には乾いた白い泥がこびりついていた。……こっちを見ている。ちょっと悩んで、寮母さんには車の中で待ってもらうことにした。

持ち上げた亀は、ズシリとした手ごたえがあった。額ににじむ汗を感じながら、道路を渡る。逃げるそぶりもなく僕の手に収まったこいつは、助けられて当然と言わんばかりに、無表情だ。亀だから当たり前だけど。
いつもは水鳥やコイが間近で見られる豊かな池は、黄土色に濁っていた。枯れた枝やごみがところどころ浮かんで、漂っている。
のぞき込むと泥の匂いが押し寄せて鼻が曲がりそうだ。放水したのだろうか、意外にも水嵩は低く、ここで放るわけにもいかない。大学校内にある、水源池へと降りる階段に向かった。懐かしくてあたりを散策したくなったが、亀が急かすように手足を動かす。僕の哀愁をよそに、亀は振り返りもせず水中にもぐっていった。漂っていた一つの太い枝によじ登って、目をしばたかせている。暢気なものだ。こんな少しの運動だけでも、肺の中には熱い空気が渦巻いている。
どこか遠くからセミの声が聞こえてくる。この時期では耳をつんざくほど鳴いていてもおかしくないはずだが。この暑さで参っているのは、どうやら人だけではないらしい。歩きながら見上げた空は、憎らしいほど青かった。
平成最後の夏は記録的な猛暑だ。

荷物持ちがいるからたくさん買えるわぁ、嬉々として人込みに突っ込んでいく寮母さん。片手は杖をついているのに、すごい勢いだ。引きずられるように間を縫って進む。

スーパーには生鮮食品を求める人だかりができていた。少し休まんね、と言われて抜け出した先は飲料水コーナーだった。みんなが買い求めたせいでとっくに空っぽだ。断水の発表があったときには、ここもきっとすごかったのだろう。カップ麺なんかもすっかりなくなっていた。何もすることがない。

寮母さんに一声かけて、僕は商店街へと繰り出すことにした。

休日には観光客でにぎわうはずの商店街。「古き良き」をトレードマークにしている通りは、ほとんどがシャッターを下ろしていた。井戸が開放されているので人通りはあるが、とても活気があるとは言いがたい。水を汲みに来た人たちの顔も、どこか疲れをにじませているように見える。

「こら、汚さないの、洗えないんだから」

「だって疲れたんだもん、アイス食べたい」

声がしたほうを振り向くと、地べたに座り込んだ少年が叱られている。姉だろうか、少年を叱る少女の額にも前髪が張り付いていた。

歩く手足にまとわりつく海辺独特の熱は、普段なら海辺の町特有のアクセントだ。しかし今はそれすら煩わしい。そのまま一通り商店街を見て回ったが、人気のパン屋もラーメン屋も、臨時休業の札が下がっていた。

海沿いのコンビニは尾道限定の品々が置かれている。飲料やインスタント食品は空っぽだったけどアイスは余っていた。僕はたまごアイスを手に取った。尾道では有名なアイス屋のものだ。余っていても普段よりだいぶ品薄だった。底の見えたクーラーボックスなんて初めてだ。冷却シートで汗をぬぐう。一瞬は冷めた熱だったが、日向に出てしまえば痛いほどに肌は焼けてしまった。

そのまま駅前のパーキングまで、堤防を歩く。足元で寄せては返す青色は、鈍い音で船を揺らしている。ゆりかごみたいな音色と口の中で溶けていく甘いクリームに、町のにぎわいを思い出した。いつもなら、釣り人や、恋人なんかがいて。みんながこの雰囲気を楽しんでいる。いつもなら、が頭の中でゆらゆらとめぐっていた。

焼きつくさんばかりの光の中、動く影は一つだけ。確認すると、暑さはその日の最高潮に達していた。

買い物が終わって荷物を運び終わると、寄り道をしないかと寮母さんに提案された。

車で大学の近くまで登る。ダムの堰堤を渡って山沿いの林道をしばらく進むと、水源池へポコリと飛び出した一角がある。何があるのかは僕も知っていた。

祠だ。

等間隔に並んだ細い杉の木はまるで境界のようだ。炎暑の陽光に焼かれた奥のつつじは、葉先が茶色く枯れて、祠にも葉や枝が張り付いている。けれど、それ以外は僕の記憶のままだ。水際で乱反射した光が、祠の隣にあるコナラをちらちらときらめかせる。木漏れ日と水辺の光が乱反射する空間は不規則で、そして美しかった。

絨毯のように敷き詰められたやわらかい苔に足を踏み出す。赤い夕陽に照らされて、別世界に来たような不思議な気分に囚われた。

僕はここで絵を描くのが好きだった。もともと農業用水のために作られたダムで、その神様が祭られているらしい。

寮母さんと二人で手を合わせる。どうしようも

ないことも多いけど、これから先の未来になにか希望があるように。みんなが耐え忍ぶ今に見合った、報われる何かがあるように。

足元で、何かが動いた。驚いて後ずさりした視線の先には、亀。縮めていた首がゆっくりと伸びる。寮母さんが怖がりじゃねえと笑う。僕らが祠をきれいにするのに結構歩き回ったのに逃げなかったし、人慣れしているのかもしれない。

「あら賢い。もしかしたらここの神様のお使いかもねぇ、『亀は長生き』っていうけん」

「まさか」

しゃがみこんで目を合わせる。もしかしたら、昼間に見たやつと同じかもしれない。寮母さんに伝えると、ますますおとぎ話みたいねと喜ばれた。シャツの胸元を仰ぎながら、そろそろ帰りましょうか、と声をかける。久しぶりの運動のはずだ。夕闇も近いのに暑さも弱まる気配はない。というか、これ以上は僕がきつい。

干からびないようにな、と亀に手を振る。

「でももし本当なら、この暑さ、どうにかしてほしいですね」

ポタ。

鼻先が、濡れた。見上げた空から、こまやかな雨粒が落ちてくる。思わず後ろを振り返ろうとしたとき、

ドポン。

と水音がした。

夏を、柔らかな雨が冷やしていく。今がチャンスだといわんばかりに、セミが勢いよく鳴きだす。山の緑もみずみずしさを取り戻していく。水辺に降り立った鷺の羽ばたきが聞こえる。僕の体の火照りが、鎮まっていく。

その優しい雨は、暑い夏の日を緩めるかのようにこの町を覆った。一晩ふり続けたのだと、後に寮母さんに聞いた。

「雨之水分（みくまり）神社、か」

つぶやいて、立ち上げたパソコンの画面に目を落とす。

水分の神。水の分配をつかさどる神。水分点や水源地に祀られる、雨ごいの神。尾

在りし日の夕暮れ

在りし日の夕暮れ

石原 遼一

絵：山根 翔

4／2

住まいを、妻の生まれ故郷の尾道に移す。坂が多く、古家が多い。坂と古家の間をネコがちょろちょろと駆けている。穏やかな街だ。

4／3

高台の空き家を借りて住むことにした。妻の要望だ。いつでも、街を一望できる場所がいいのだそうだ。確かに、ここからなら、軒を連ねる家々も、街を横断する貨物列車も、穏やかな海も、全部見られる。私もここから見る景色を気にいった。

「すてきな街だね」私がそういうと、妻は「千光寺の方から見るともっと綺麗なのよ」と答えた。「私はずっとそれを見て育ったんだ、いーだろ！」

4／4

足腰が痛む。昨日は空き家の片づけと荷物を運ぶ作業で一日が終わってしまった。通常の荷物に加え、イーゼルやキャンバスを運ぶのはとても骨が折れた。

5／8

尾道に来てから一ヶ月以上経つが、彼女の体に急激な変化はない。家事も昔と変わらずできる。「手伝おうか？」そう言うと、いつも「あなたは、絵を描いてて」と言われた。

5／15

尾道に来てからずっと絵を描いている（それが本業だろ、と言われればそれまでだが）。

この街には、私に筆をとらせる何かがあった。妻も私が描いた路地の絵を気に入って新居の玄関や居間に飾ってくれた。意気揚々と絵を飾る妻を見ていると、私の中の何かが満たされた。

5／22

いつものように妻に絵を見せた。すると、彼女はいきなり「あなたには素敵な景色見せてもらったからね。おかえしに私のとっておきの景色あげるよ！」

と、腕組みしながら言った。

5／25

千光寺へ向かう道のりは急な坂が多く、彼女には酷かと思われたが、彼女は意外にも快活に歩いていった。むしろ、私より早く歩いた。私は彼女を追いかけた。

千光寺についてからは、参拝したり、句碑を眺めたり、最寄りの美術館で地元の作家の作品を見て過ごした。妻は「あなたのもここに展示されるようになればいいね」と半ばからかうように言っていた。

そして、夕方になって、妻は私を「とっておきの景色」が見られる場所へと案内した。

妻が私を連れて行ったのは、千光寺山頂にある展望台の上だった。そこから、見える景色を前に私はしばし立ち尽くした。

それは、茜色の衣を纏った尾道の街並みだった。寄り添うように立つ家々にも、穏やかに流れる海にも、海を行く渡船にも、仕事を終えた人々にも、夕日は平等に射していた。時折、家路を急ぐ子どもたちの声が、その風景に響く。どこからともなく夕餉の匂いが漂ってくる。一幅の絵画のような景色に見惚れていると、隣で彼女が口を開いた。

「なんだろうね、この景色を眺めてると、おつかれさまって言われてるみたいなの。ああ、今日ももがんばって生きたな、明日もがんばろって……たぶん、ご褒美なのよ。この景色は。私にとっても、誰にとっても」

時よ止まれ。人々の営みの終わりにある景色よ。私たちの今よ。どうか止まってくれ。

心から、そう祈り、私は彼女を抱きしめた。

6／7

最近、天気が優れないせいか、妻の体の具合もよくなかった。寝込みがちだった。

6／8

妻がベッドの上で何やら、こそこそ作業をしていたので「何してるの？」と尋ねた。すると、悪戯っぽい笑みを浮かべて「ひーみーつ！」と言っ

て後ろ手に何かを隠した。

6／9

庭の紫陽花を絵に描いた。妻にそれを見せると、ベッドの上でパタパタと跳ねた。体全部で嬉しさを表現しているようだった。

彼女は顔をくしゃくしゃにして喜びながら、

「それじゃあ、わたしからも！」

そう言って窓を指した。てるてる坊主が、二人いた。

「あのね、こっちの笑ってるのが私で。この、弱そうなのが、あなた！」

私が苦笑して

「そんなに頼りなく見える？」というと、妻は

「そうだよ。君はビビリで、泣き虫で、優しい。だから私がずっと一緒にいてあげるの」

私は、「……そっか」ただ一言だけ伝えると口をつぐんだ。それ以上喋ったら震える声を聞かれそうだったから。

7／10

今日は食欲がないらしい。

朝食も、昼食も半分以上残していた。

7／16

日差しが強くなってきた。

気温も上がり続けている。

彼女の体が心配だ。

8／10

また新しく絵を描いた。

彼女に見せると「素敵ね」と言って微笑んだ。

その横顔は前よりもやつれて見えた。

8／21

私は何もできない。苦しんでいる妻を前にして、何も。

彼女はここで、最期を迎えるつもりだ。

私は妻に入院を勧めた。だが、彼女は頑としてきかなかった。

「私はね、むしろちょっとわくわくしてるの。だって、最期まであなたが一緒にいてくれるもの……ちょっと贅沢かな？」

10／9

木々が色づく。熟した赤や、淡い黄色が、未だみずみずしい緑の中に入り混じっている。私はそれらをキャンバスに描きながら、先ほどからずっと胸を刺すものがあることにも気づいていた。どうしようもない時間の流れ。もう二度と戻らない時間。それは同時に、妻のことでもあった。彼女との日々はあっという間に過ぎていった。充実した日々だった。しかし、それはもう戻ってこないのだ。日に日に弱っていく彼女。元気な彼女にはもう二度と会えない。そんなのは嫌だ。嫌だ。嫌だ。だが、私にはどうすることもできない。それなのに、彼女は絵を描いてくれという。あなたの絵が私の心を穏やかにするからと。そんなの気休めでしかないだろう。……何もできない。だが、それしかできない。

11／20

震えながら筆をふるう。無意味、徒労。違う、意味があるはず、きっと何か意味が……そうしていると、頭の中にある景色が浮かんでくる。

半年前に見た尾道の夕景。時よ止まれと願ったあの景色。

……そうか、そういうことか！ わかった、私が絵を描く意味が！ うん、きっとそうだ、そうに違いない！

12／13

絵を描くことの意味、それはきっとこうだ。

「一瞬を閉じ込めること」

それ以外にない。その時、感じた匂いを、体温を、感動を、絶望を閉じ込める。

そうして出来た絵は、まさに誰かが生きていた証だ。私は彼女の生きていた証を残す。

あと少しだ。もうじき完成する。

（日付不明）

遂に、描き切った。俺は、遂に時をとめることが出来たのだ。

すべてが、ここにある。夕暮れ、染まる街並み、その優しさ、幸福感、切なさ、彼女の匂い、声、ぬくもり、浮かべる笑み……この絵を見れば俺はすべてを思い出すことが出来る。……間に合ってよかった。満足だ。こんな幸福なことがあるだろうか？ だって、俺は君がいなくなった世界でも、

やっぱり君と一緒にいられるんだよ。ああ、何度でも言おう。

俺は幸福だ！

＊

老人はそこで手記を閉じた。彼はその黄ばんだ表紙を懐かしげに撫でていたが、しばらくすると、手を止めて部屋を見渡した。部屋にはたくさんの絵が飾られていた。壁を埋め尽くす絵はすべて尾道の景色である。老人の思い出の景色……だが、そこに新しい絵が加わることは、もう、ない。

窓辺にはベッドがあった。寝具は丁寧に畳んであり、まるで新品のようだったが、ベッドの寝具が置かれていない部分はうっすら埃が積もっていた。窓枠に二人のてるてる坊主がいて、一人は笑い、もう一人の表情はインクが滲んでうかがい知れなかった。泣いているようにも見えた。

窓の外は夕暮れだった。茜色に染まった街並みが老人のいる部屋から見えた。

千光寺の方から見るともっと綺麗なのよ。

老人ははっと気づいて、ベッドの脇にイーゼルに載せておいてある一枚の絵を手に取った。老人はその絵をじっと見つめた。そのうち、彼の顔に幸せそうな笑みが浮かび始めた。何分そうしていただろうか。気づけば先ほどの夕日も西の空に没しようとしていた。景色が全体的に青みを帯びる中、夕日は最後の光の雫を空にこぼした。

同時に、絵の上にも、ぽたり、雫がこぼれた。老人は思わず、落涙していたことに驚いた。袖で涙をぬぐう。けれど、老人の意志に反して雫はとめどなくこぼれる。必死に拭う。それでも拭いきれない涙があった。それは、頬を伝って絵に落ちた。

泣き崩れる老人の涙を受けても、絵の中の女性は微笑んだままだった。あたたかく、優しい風景に抱かれて、女性は幸福そうだった。苦しみも悲しみもない世界から、女性は微笑みかける。泣きやまない老人に向かっていつまでも。在りし日の夕暮れの中で、いつまでも。尾

約束の日

約束の日

則直 真衣

絵：今井 ゆめ

多分、未来は来ないだろう。

商店街をぬける前に、康生は傘を開いた。パンッと勢いよく開いたビニール傘は、数滴の水の跡を乾いた地面の上に作る。アーケードをぬけると、容赦なく雨は傘に降りかかってきた。ジーパンには傘で防ぎきれなかった水滴が幾つもつき、所々に濃い青色が広がっていく。今朝から降り始めた雨は、一向に止む気配はない。ビニールを破らんばかりに、雨は強く康生の傘を叩いてくる。まるで弾丸でも降っているかのようで、傘を持つ手は少しばかり震えていた。

多分、というより、絶対に、未来は来ない。

その相手に会いに行くために、こうして自分は雨に降られながら、服を濡らしながら歩いているのだ。バカバカし過ぎる。

康生の目的地である八幡神社は尾道駅から大分

離れている。アーケードを抜けてからもかなり歩かねばならない。普段歩かないせいで、ふくらはぎがじわじわと熱を持ってくる。今日晴れてくれれば、少しばかり歩くのも楽だっただろうに。

現に、あの日は走り回っていた。今と同じ道を、黒い髪の後頭部を見ながら、汗を流しながら、日に焼けながら、笑いながら。丁度十年前のことだ。

今日とは正反対みたいな、とにかく暑い日だった。

蝉が鳴いているな、と思いながら窓を閉めたことをよく覚えている。クーラーの利いた部屋で、夏休みの宿題を午前中にやるのが、当時の康生の習慣だった。半分ほど計算ドリルが終わったところで、チャイムが何度も鳴った。何の前触れもなく未来が康生の家に来ることは、よくあることだった。家に上がり込んだ未来は、康生の隣で、暇だ暇だと何度も叫んでいた。暇なら宿題でもすれば、と康生は言ったが、そんな気分じゃないと言い放ち、引き続き暇だと叫びまわっていた。未来が来てから五分もしないうちに、探検に行こうと言われた。言ったといってもそれは宣言に近く、康生に拒否権は無いに等しかった。イコールを書いた計算式をそのままにして、康生は家から連れ出された。

外に出てから五分もしないうちに汗は噴き出してきて、暑い暑いと言い合いながら歩き回って走り回った。午前中でも夏の太陽は容赦なく照りつけていて、セミの声はけたたましく鳴っていた。あまりにも暑くて、名前も知らない神社の手水舎で水を掛け合ったり、小遣いで駄菓子屋のアイスクリームを買ったりした。びしょ濡れになったサンダルで歩きながら、未来は半分ほど溶けているオレンジ色のアイスクリームを美味しいと言っていた。未来はアイスクリームと言えば、ずっとオレンジ味だった。オレンジ味が好きなのかと問えば、味というよりオレンジ色が好きなのだと、訳の分からない返事が帰って来た。ふーん、と康生が言うと、納得していないことを未来は感じ取ったのか、ムッとした顔になった。康生だってずっとバニラばっかりで面白くない、というようなことを言ってきた。味に面白いも面白くないもないだろうと思ったが、言わなかった。

溶けかけたバニラ味のアイスクリームはぬるく、ちっとも涼しくはならなかった。食べ終わってからもずっと、口いっぱいに甘ったるさだけが残っていた。未来は、ずっとオレンジの味がすると喜んでいた。

道が石畳になっていることに気がついた。そろそろ目的地が近い。自然と歩幅は大きくなっていた。靴はもう全体が濡れていて、水たまりを一々避ける必要はなくなっていた。何度か水たまりに足を突っ込んだが、もうどうでもいい。歩く度に靴からは水が染み出ているように思えた。先程よりも、雨足は弱くなっている。弱いとは言っても、まだ傘に弾かれた雨粒がばらばらと音を立てる程度ではあったが。

道の脇に石柱が見えた。近づいていくと、石には「八幡神社」と黒く彫られた文字が読める。その石柱を起点として、今までの道から逸れた小道がまっすぐに延びていた。もうすぐだ、と康生は一息ついた。

「八幡神社」と彫られているが、目的地はここではない。石柱のすぐそばには、石畳がまっすぐに伸びているだけだ。その石畳は鳥居の下をくぐり、十段ほどの階段へと繋がっていた。民家が両脇に連なる石畳の道を、康生は真っ直ぐに進んだ。もうすぐ着くというのに、達成感よりも焦燥感の方が大きかった。

何度も自分に言い聞かせる。未来が、来るはず

がない。絶対に。

階段を上ると、また石畳の道があった。今度は短く、大きな門をくぐるように繋がっている。道に対して正面を向く一対の狛犬に睨みつけられながら、門をくぐった。門の先は道路があり、その道路を超えた向こう側に、階段があった。正真正銘の、目的地へと続く階段だ。

道路では車が多く、突っ切ってしまうことは難しいように思えた。多少遠回りになるものの、少し歩いたところにある横断歩道を使って向こう側に渡った。子供の頃はこの神社については特に何も思わなかった。しかし参道が分断されるような形で道路が通っているこの風景が、滅多にあるものではないのだとこの十年で気づかされた。

探検と称して、未来と康生は千光寺や西國寺や、とにかく色んな所を廻った。その一つが、この八幡神社だった。道路に面した階段を上りきると、すぐにそこに踏み切りがある。警報機が鳴っていないから電車は来ないと分かっているものの、渡っている間に電車が来たらと思うと、ついつい立ち止まってしまうのだ。右を見て、左を見て、もう一度右を見て、と安全確認をしなければ落ち着かない。あの頃から十年経った今でもそうだ。未来の早く、という声が聞こえてくるような気がした。

線路を何の躊躇(ためら)いもなく横切った未来は、早く早くと康生を急かしていた。線路を超えた先の階段からも、未来は遅いと康生に向って何度も言っていた。正午近くになって、日はこれでもかというくらいに照り付けていた。こんなに暑いのによく走れるな、と思いながら康生は階段を上った。待ってよ、と言っても未来は早く、というだけで全然待ってはくれなかった。康生が階段の半ばくらいを上ったところで、いっちばーん！ と階段を上りきって高らかに叫ぶ声が聞こえた。未来は何かある、と声を上げて境内を走っていた。康生が階段を上りきった時、未来は境内の左手にいた。ほら見て、と康生を手招きして呼んだ。呼ばれた先には、二つの大きな石が横たえられていた。長方形の石で出来た枠に囲まれ、砂利の敷き詰められた上に置かれてある。丸い長方形のような形で、教科書で見た俵みたいだと思った。石の表面はつるりとしていて、磨かれたような滑らかな質感があった。左側の石の表面は凹凸が少ないが、右の石は何かの文字が彫られていた。

その二つの石の向こうには、茶色の木の板に「力石」という文字と、その説明の書かれた白い紙が、画鋲で四隅を張り付けられていた。「力石」の説明書きの難しい漢字は読めなかったものの、『力石とは力だめしをする石のこと。』『上げる力が成人の資格と考えられ』という二つの文は小学生でも読めた。未来はその文を読みあげるなり、持ち上げてみようとはしゃいだ声で康生に言っ

た。触って良いものか分からないから止めよう、と康生は言ったが、見つからなければ大丈夫だと未来は聞かなかった。結局いつものように康生が折れて、一人ずつ石を持ち上げようとした。当然、十歳の子供の力では持ち上がらず、石は浮く気配も無かった。もう帰ろう、と康生は言ったが、未来は悔しそうに唸るばかりで頷かなかった。未来は極度の負けず嫌いだった。縄跳びも、靴飛ばしも、プールも、康生が勝つと悔しがって、もう一回、もう一回と、未来が勝つまで繰り返された。

もう帰ろう、と康生の何度目か分からない言葉と同時に、未来は顔を輝かせて康生を見た。未来は石の説明が立ててある方へと廻り、右の石の下に手を回した。それを見ていた康生にも、早くそっちを持てと声をあげた。困惑しつつ石を下から支えるように持って、何をする気なのかと問うた。未来は得意げに笑って、自分も十歳、康生も十歳なら合わせて二十歳で、そうしたら力石は持ち上がるはずだ、と声高々に告げた。

この石は力試しをするためのもので、別に持ち上げることが目的じゃないし、そもそも二人でやっていいのか、等と言いたいことは山のようにあった。しかし、未来のせーの、という声で康生の言葉は封じられた。

石はわずかに、ほんの数ミリだけ持ち上がった。石が浮いた時間は数秒にも満たなくて、二人同時にもうムリだと叫んで手を離した。未来も康生も、はあーっと大きく息を吐いて、その場に座り込んだ。疲れたー、と未来が叫んでいるのが聞こえた。

指の先がしびれるように痛くて、それなのに手は白かった。グーとパーの形に手を動かしていると、ようやく手の色は戻ってきた。じんじんと手のひら全体が震えだし、どくどくと血管が開いたような、妙な感覚があった。手は驚くほどに熱

かった。もう一度手のひらを握りこんだ時、未来は何かを言った。何を言ったのか聞き取れなくて、聞き返すと、未来は跳ねるように立ち上がって、康生の元へと歩み寄った。康生の顔を覗き込みながら、「今回は特別じゃけえな」と前置きをして言った。

「大人になったら、勝負しょうや。どっちもが二十歳になって、どっちが持ち上がるか勝負じゃ」

約束じゃけえな、と未来は笑っていた。たまたま触れた未来の手は康生と同じくらい熱くて、ざらりと砂の粒が擦れる感触がした。

もうずっと前の、十年も昔のことだ。それ以降未来が、その約束について口にした覚えはない。だから絶対に、未来は来るはずがない。忘れていて当然なのだ。覚えている方がおかしい。十年も前の、子供の頃の、取るに足らない約束。一晩寝てしまえば忘れてしまいそうな約束。覚えているはずがない。

それに、小学校の高学年になってから未来とは遊ばなくなった。特に喧嘩もしたわけではないが、自然と離れていった。男同士、女同士で遊ぶようになったのが大きいのかもしれない。中学ではほとんど口も利かず、高校では話した記憶すらない。その後どこへ進学したのかも知らない。電話番号もメールアドレスも、ＬＩＮＥのＩＤも知らない。相手だって同じような状況だろう。そんな相手との約束なんて忘れている方が当たり前だ。分かっている。だったらどうして、相手がいないと思いながらこうして来たのだろうか。

本当は分かっている。それこそバカみたいな理由で、笑い飛ばしたくなるくらいに単純だ。忘れられなかったからだ。よりにもよって、誕生日の次の日にあんなことを約束したものだから、誕生日が来るたびに思い出してしまうのだ。そういえば去年約束したなと思い出し、その次の年は思い

出したことを思い出し、次の次の年は忘れていないことを思い出した。忘れてしまえばどんなに楽だっただろう。覚えているから気にかかり、もし来ていたらなんて有り得ないことを想像し、行く気なんてなかったのに、こうして雨の中を歩いている。バカバカしいにもほどがある。

それでも、来ずにはいられなかった。

最後の一段を、上った。

どこにも人の姿はなかった。分かっていたことだった。

力石の元へと歩み寄る。石畳の道を外れ、大きめの砂利を踏むと足の裏が少しだけ痛んだ。さらに進むと、粘土のように柔らかくなった土の、不安定な感触で滑りそうになった。力石は十年前に見たころより、ずっと小さく見えた。今では、張り付けられた説明書きも全て読めた。

『力石とは力だめしをする石のこと。その由来は神霊の依坐である石を持ち上げることで豊凶・天候・武運等の神意を伺う石占の信仰に遡るとも言われている。又、米一俵分の重さを担ぎ上げる力が成人の資格と考えられ、それを証すために用いられた力石もあった。しかし、やがて本来の意味を失い、若者の力自慢の道具と見られるようになっていった。尾道が北前船の寄港地であったことから、江戸時代、浜の沖仲仕達が力自慢をしたと伝えられている。』

しゃがみ込んで力石に触ってみた。濡れていて、晴れた日よりも光沢が増しているように見えた。

冷たい風が頬を撫でる。随分と弱くなった雨が腕にふりかかる。ぽっかりと開いた胸の穴に、その風が通り抜けていったような気がした。待っていないことなんて、分かっていたはずなのに。

ゆるくなった地面を踏みつけて、元の道へと戻った。今更、雨は止み始めていた。もうビニール傘を叩く雨の音はせず、しとしとと細い糸のような小雨になっていた。傘を閉じると、傘の先端から水滴がぽたぽたと流れ出た。まだ傘を閉じるには早い気がしたが、火照った康生の身体には丁度良かった。傘を地面につきながら、階段を降りる。泥や水で、足を滑らせそうだった。

遠くで高い音が鳴った。顔を上げると、赤いランプが光っているのが見えた。カンカンカンカンと何度も鳴りながら、遮断機はゆっくりと下りていた。

康生が階段を降りる頃には、もう電車は通過し終わっているに違いない。そう思って、階段を降り続ける。一歩踏み出すごとに、ぐじゅり、ぐじゅりと靴は嫌な音を立てる。このままま駅まで歩かなければならないのかと思うと、嫌になった。

ガタンゴトンと鉄の擦れるような音が、一際大きくなる。階段を降り切っても、まだ電車は通過していなかった。特に何をする訳でもなく、ぼ

うっと通過する電車を眺め続けていた。暫(しばら)くすると甲高い音は止み、遮断機が上がった。それでも康生は動かなかった。動けなかった、という方が正しいかもしれない。何度瞬きをしても、目の前の光景は変わらなかった。

踏み切りの向こう側に、オレンジ色の傘が見えた。

創作民話マップ

尾道草紙 14
創作民話マップ
マップ絵＝後藤 裕衣
その夏
雨之水分神社
よるのはなし
久山田水源池
尾道市立大学
OKAYAMA→
←HIROSHIMA
先輩はそう言って、
ポケットからスマホを取り出した
千光寺公園
TENBODAI
CHIKARAISHI
約束の日
久保八幡神社
雨とアジサイ
持光寺
ENMYOUMON
在りし日の夕暮れ
千光寺展望台
虹のたもとで
尾道水道
MUKAISHIMA

執筆後記

先輩はそう言って、ポケットからスマホを取り出した

山田 茉里奈

高校生の時から憧れていた『尾道草紙』に参加することができて、とても光栄です。

私の作品は今回の『尾道草紙』の中で一番短く、本文は会話のみで構成されています。また舞台となった場所を明示していません。尾道をよく知っている方もそうでない方も、尾道の街を歩いた際にこの作品をふと思い出し、「二人が会話していたのはこの道かな」と想像して楽しんでいただけると嬉しいです。

絵・平 華乃

この度、挿絵を担当する機会をいただきましたことを、この場を借りて感謝いたします。明るく元気な先輩の男の子と、先輩よりも落ち着いている後輩の女の子。二人の微笑ましいやりとりから感じられた距離感を一枚絵に表しました。背景は、彼らが登る道のイメージです。二人に尾道の桜の如き春が訪れんことを願っています。

虹のたもとで

安部 紗弥香

尾道草紙、初めて見たのは高校のときでした。受験のために尾道へやってきて、大学案内で尾道草紙の存在は知っていたので、店頭で見つけたときは大はしゃぎしたことを今でも覚えています。

そんな尾道草紙に今回載せていただいたのは、龍神と女の子のお話です。ほとんど出てきませんが、女の子のお父さんが好きです。たくさん指導していただいて、何とか形にすることが出来ました。

力不足ではありますが、ほんの少しでも、誰かの心に残るような物語となっていれば幸いです。

雨とアジサイ

樫山 奈由

この話は、実際にアジサイが綺麗な時期に持光寺を訪れた時のことをもとに作りました。あの日もちょうど大雨で、石門の先では青や紫、とにかく色とりどりの花が出迎えてくれ、とても感動したのを覚えています。

アジサイの花言葉の一つに、「辛抱強い愛情」というものがあるそうです。これは、辛抱強く、深く、あなたを想っていますという気持ちが込められている言葉です。そのあたたかく、少し切ない愛を、作中の夫婦のやりとりからも感じ取ってくださったら幸いです。

絵・姫野 七海

尾道草紙のことは入学前から知っていたため、今回挿絵という自分の好きな分野で携わることができ大変光栄に思います。尾道ならではの島々や水道が舞台のお話ということで、制作を通し改めてその魅力に気づく機会にもなりました。

絵・伊東 桃奈

このお話を読んだ時に感じた、二人の大切な時間の輝きが伝わるように、と思いながら描きました。このような素敵なお話に出会えたこと、また挿絵担当として携われたことを光栄に思います。ありがとうございました。

よるのはなし

見谷 香乃

皆さん、きれいなものはお好きですか。私が尾道に来て一番おどろいたことは、雨さえ降らなければ、テレビで見るような星空を毎日見れることでした。あんまり綺麗で、勉強やバイトの疲れが空を見ただけで吹っ飛んだ。このお話は、その感動を皆さんに自慢するために書きました。

今回お話を読んでくださった方々が、ものの美しさに気づけるような、安らかな日々を過ごされることを祈って。

絵・矢川 千陽

夜の静けさや美しさだけでなく、人のやさしさ、あたたかみが伝わるような素敵なお話だと思い、何度も読ませていただきました。言葉と絵、表現の方法は違っても、同じ目的や感情を捉えひとつのものをつくることができる、「芸術の力」を改めて知りました。完成した挿絵が、見谷さんの作品の一助となれば幸いです。

その夏

谷坂 利香

なんとか今年中に、と突き動かされるように描きました。いろいろなことがあった夏。尾道の人々がどのように過ごしたか取材し、ときに想像を膨らませながら言葉を紡いでいきました。大雨の後の濁った水源池で日光浴をする亀たちや、給水に並ぶ人々。感情を揺さぶられることも、多かった。

何かを失って、それでも歩いていく人々に少しでも届くといいと思います。

絵・斎藤 七世

ストーリーが断水の時期ということで、去年の七月を思い出しながら描きました。このような素敵なお話の挿絵を担当出来て嬉しかったです。ありがとうございました。

在りし日の夕暮れ

石原 遼一

生きてる限りいつだって何かにがんじがらめにされるほかないのですが、夕暮れに見惚れる瞬間だけ、すべてから解放されます。もしそんな幸福な一瞬を永遠のものにできたら、人は何を感じるだろう、と考え始めたのが、この作品を書いたきっかけです。

挿絵を担当してくれた山根くん、また編集の皆様、本当にお世話になりました。ありがとうございます。

絵・山根 翔

挿絵という初めての経験をしたことにより、学ぶことの多い貴重な時間を過ごすことが出来た。この居心地のよい尾道の情景を文章と絵の合作によって、普段の印象と違う尾道の姿が表現できたのではないのかと思います。

約束の日

則直 真衣

尾道のどこを舞台に作品を書こうか。そう思いながら散策していたところ、「八幡神社」と彫られた石柱に目が止まりました。大通りから外れた石畳の道。道脇に構える鳥居。大きな門。その先の国道。国道の先の線路。線路のすぐ先にある神社。境内の中にある力石。「八幡神社」を取り巻くすべてが、新鮮なものばかりで驚いたことを覚えています。この神社の独特な雰囲気を描きたい、という思いからこの物語が生まれました。少しでも楽しんでいただければ幸いです。

絵・今井 ゆめ

今回描いた画がお話の表情を豊かに伝えられるものとなっていれば幸いです。

尾道草紙の制作に関われたこと、とても嬉しく思います。

イマジネーションのチカラ

美術学科　教授
野崎 眞澄

今年の挿画チームのコース構成は、デザインが四名、日本画が二名、油画が一名です。美術学科の三つのコースの学生が、挿画を担当するようになって三年になりますが、今年の特徴は、デジタルで描かれた絵が過半数を占めているということでしょう。画材は違っても、描かれたモチーフやそれぞれの文章に寄せる思いに違いはありません。小説の世界と挿画の想像力がひとつになって、読む人の心に届く作品になるのです。その意味で挿画とは、作家が言葉で説明していない文章の行間を、イマジネーションのチカラで埋めていく作業と言えるでしょう。文章に寄り添いながら、小説の世界の背後にある温度や空気のようなものを、感じ取って描くことが大切なのです。

このことを踏まえてあらためて今号を見てみると、どの挿画も小説のテーマを魅力的に描いた絵になっていると思います。地図を頼りにお話の舞台となった場所を散策してみれば、思いがけず尾道のあらたな魅力を発見できるかもしれません。

『尾道草紙』と誌面づくり。

美術学科　教授
世永 逸彦

私の研究室では、三名の学生が、表紙と誌面を中心にデザインを担当させていただいてます。テキストを創作する学生と、イラストレーションを仕上げる学生、この二つは誰にでも解りやすいところでしょう。それに加えて、編集デザインの役割とはなんでしょう？　それは、主役のテキストを読みやすく文字組みし、それらに添えられるイラストレーションとテキストとの関係性を見つけだし、誌面づくりや外観のイメージ（＝表紙や題字）を、『尾道草紙』という生きた媒体の姿に導く役割といえます。

建築の世界に例えると、展示空間である美術館・博物館、あるいはギャラリーなどの建物を設計する役割に近いかも知れません。展示物や美術品そのものには特に介在しないで、その魅力を最大限に引き出せる様に、必要とされる展示空間を構築する役割……。

この機会に、編集デザインの世界にも注目していただけたら幸いです。

尾道草紙バックナンバー

二〇〇五～二〇十八

尾道草紙1　創刊号

ことほぎのしろ／安部星子
神輿／澤村晋作
港の双子／天木俊
ポンポン岩と千の光／石田めぐみ
夏の終わりの幻想／菅亜未
雁木の夢／光原百合

表紙絵／新枝友里

尾道草紙2

涙土手／市川敬太
盆通い／新屋法安
青い空／こはらさち
猫主様／三浦幸子
約束一つ／前田美穂
かくれん坊／水戸川奈緒
西国寺山の天狗／三木慶美
お稲荷さん／藤井優希
花吹雪／光原百合

表紙絵／高田知枝

別冊尾道草紙
尾道ベッチャー祭り二百年記念号

一宮神社のベッチャー祭り／田村禎英
帰省／光原百合
面の精たち／松尾るりえ
神輿の宙廻し／田村禎英
帰郷／光原百合

表紙写真／土本壽美

尾道草紙3

仁王様と橋／岡村めぐ美
でべらおに／永田悠史
三つ首様と桜の木／宮本真里
阿犬吽犬／倉垣裕太
だごんさま／徳田翼
猫の花嫁／真野美樹
ええもんの竜／大場賀輝
オオクスノキサマ／松尾るりえ
福と石と猫と／黒田直樹
松になったとんび／横山奈津紀
尾道に住むふたりの神様の話／柴智寿恵
よいのなごりを／吉山結

表紙絵／中屋萌梨

尾道草紙4

音の鳴る道／南優香
潮騒に誘われて／黒田直樹
今宵に白く／松田佐穂
語り夜／上田恵里奈
八幡参道／森元瑠衣
追いかけ鬼／衞藤清美
水売りと井戸／原田佳美
小さな狛犬／見分小百合
かんざし未練／中根香織
だんだんおはぎ／鎌倉勇弥

表紙絵／岡本晴夏

尾道草紙5

ひるねでらのあまのじゃく／藤原遥香
桜色、春衣／藤田絢香
飴の音／塩田恵美
つらなり灯り／森田彩樹
おばあちゃんとみちの空／長友美聡
玉の浦物語／鎌倉勇弥
花房さん／山本理紗
なごりとなりて／栢木希望

表紙絵／山室芳恵

尾道草紙 6

まいごみち／川端彩佳
河童とり網／菊池麻衣子
八坂の狛犬／千葉菜美
逃げていく赤／佐藤麻衣
満天童子／中根香織
釣り人／橋原彩
狛犬と蹴球／武田真由子
夜桜招待券／鎌倉勇弥

表紙絵／中島有加

尾道草紙 7

ようおまいりのお地蔵さん／大内雅代
桜井戸／山下美由紀
水猫／宮崎綾
玉の岩の話／張明珠
ある日の夕景／奥山春菜
灯火／藤尾史香
思い出まいご／新井志野

表紙絵／斎藤洋美

尾道草紙 8

青い鱗／竹内しおり
鳴龍天井／大川はるか
和菓子日和／片野望未
天邪鬼の悪戯／近藤一樹
ロープウェイおじさん／井上実優
ふたりおみこし／森岡ひかり
ぼんぼり星／山根未来
神在の道／國貞絢子

表紙絵／喜來詩織

尾道草紙 9

雨音とてるてる坊主／川口俊平
あんないにん／志々田愛加
釣瓶落とし／香川莉歩子
不思議なバス／日名子紗綾
藍の手／竹口碧人
ふたりのひかり／玉沖望未
小さな願い事／山下紗季
ムーンライト・ビバップ／植村菜月

表紙絵／白石緑

尾道草紙 10

前田池のお地蔵様／松浦明日香
あおい春、あかい夏／荻野奈々
水があふれます／高橋美佳
金魚の綿菓子／宇山茄那
最後の上映会／近藤那美
空鉦太鼓／荒谷茜
こいの龍王さま／野中翔
さかしまの海／久保瑠璃
くれのあい／尾形祥子
ゆき子のみち／小林彩香

表紙絵／吉田美結

尾道草紙 11

福石猫のいる町で／岡本明香里
神鎮小路のその先で／荒川遥
松と岩／末政百合絵
願いの町／小池夏美
弥生尽の約束／光原百合
神さまのいと／井田隆代
まぼろしのさかな／田端敏之

表紙＝絵・奥村彩
装幀・長谷川さや

尾道草紙12

さくら／篠原彩
井戸の中の猫／鈴木菜月
祭りの日の思い出／立坂鞠奈
艮神社の狛犬／ト部文瑳綺
帆雨亭へようこそ。／田口悠
ある夜のお話／難波日向子
青葉時雨の降るころに／百武彩花

表紙＝絵・サンガトウ
装幀・大山由貴

尾道草紙13

手紡ぎ／飯田菜都紀
飴買い幽霊・後日談／谷口萌花
浄土寺の願掛け石／光原百合
腰掛岩のおじいさん／藤村ふゆか
ブライト・マリン・ブルー／森田彩音
かんざし灯篭伝説／森山美琴
玲瓏として／森川泰樹

表紙＝立体・船津さくら
撮影・高岡波留希
装丁・奥村菜々実

尾道草紙10周年記念ボックス

十周年記念ですので、十年間に制作した尾道草紙すべてを納められるＢＯＸを制作しました。尾道草紙創刊号から10号までと、別冊１冊を含めた11冊を納められるＢＯＸとして、美術学科野見采香さんによる尾道の風景のイラストをあしらっています。尾道草紙を中に入れたセット販売と、小物入れやインテリアとして使っていただけるようＢＯＸのみの販売も行います。

編集後記

尾崎　瞳　美術学科　表紙・編集デザイン担当

去年に引き続き、尾道草紙に携わらせていただきました。今年は表紙も担当させていただくことになり緊張しましたが、装画の小佐々さんが素敵な絵を描いて下さったので楽しみながら制作できました。去年とまた一味違った尾道草紙を楽しんでいただけたら幸いです。

古谷　木の実　美術学科　編集デザイン担当

大学に入る前からずっと制作に携わりたいと思っていた尾道草紙。今回、編集というカタチで携わることができ、とても嬉しく思います。学べることもたくさんあり、楽しみながら作業することができました。より多くの方に尾道草紙を手に取っていただけたら幸いです。

穴吹　花恋　美術学科　編集デザイン担当

ひとつの本が完成に向けて少しずつ形作られていく過程に、ただただわくわくさせられる毎日でした。たくさんの人たちが関わりあって生まれた尾道草紙。このような素敵な本に、編集という仕事で携われたことを大変光栄に思います。多くの方の元に、尾道草紙が届きますように。

小佐々　瑛美　美術学科　表紙

装画を担当しました。全物語を読み終えた時に脳裏に浮かんできた、雨上がりの清々しい風景をそのまま描いています。懐かしさと清新さを感じていただけたら幸いです。物語を読み終わった後、また表紙を見返してみると楽しめるかもしれません。

後藤　祐衣　美術学科　創作民話マップ

草紙の原稿を読んで、そのすべての舞台が自然と思い出せるようになっている自分に気づきました。尾道に来て２年、自分と同じ風景を見て、自分と違う視点から作り出された世界に触れられた貴重な体験でした。日本文学科と美術学科の共同制作に、微力ながら関わることができ光栄です。

編集後記

山田 茉里奈　日本文学科　編集担当

私自身至らない点が多く他の編集担当の方たちにかなり迷惑をかけてしまいましたが、尾道草紙の編集にかかわることができて光栄に思います。一人でも多くの方に尾道草紙を手に取っていただけると幸いです。

見谷 香乃　日本文学科　編集担当

編集の作業をお手伝いさせていただくのははじめての事でしたが、とてもいい経験をさせてもらいました。力不足ながら多くの人が関わる尾道草紙の制作に携われたことを嬉しく思います。少しでも多くの人に尾道草紙が届くことを祈って。

この本へのご意見・ご感想はこちらにお寄せください。
mituhara@onomichi-u.ac.jp

監修　光原百合　尾道市立大学　芸術文化学部　日本文学科　（教授）
野崎眞澄　尾道市立大学　芸術文化学部　美術学科　（教授）
世永逸彦　尾道市立大学　芸術文化学部　美術学科　（教授）
発行　尾道市立大学　創作民話の会
〒722-8506　広島県尾道市久山田 1600 番地 2
電話　0848-22-8311（代表）
発行日　平成 31 年 3 月 31 日
印刷　株式会社 村上オフセット印刷